

いきもの記

Vol.167 2025.12.2

生物教員 佐藤龍平

「おいおい笑っちゃうなこのルート…！」 「これ、登山じゃなくてロッククライミングでしょ！」 北アルプスの穂高連峰のおよそ“道”とは呼べないような岩稜帯を歩いていた時、ぼくはそんな悪態独り言ばかり口にしていた。YouTuberの真似をして動画を撮りながら進んでみたので、あとでその動画を見返すとその時の自分の焦り具合が伝わってきて笑えた。

涸沢（Vol.166）で紅葉を堪能した翌日、ぼくらはついに目の前にそびえたつ穂高連峰にチャレンジした。穂高連峰のうち、今回訪れた北穂高岳と奥穂高岳はともに3,000mを超える。その山頂同士を結ぶ稜線ルートは、登山道として最高難度の「E」に指定されている。日本三大岩場とも呼ばれており、北穂高岳と奥穂高岳の両方の山頂に行きたければ、一旦涸沢に降りることが無難と言われている。でもぼくは、山頂よりもむしろ、山頂と山頂の間の岩場を歩きたかった。わざわざそんな危険なところに行かなくても…と言われればその通りだが、行きたい欲の方が勝った。なぜか。それは、北アルプスの『山の成り立ち』をこの目で見て、この足で踏みしめたかったからだ！ 北アルプスには「槍ヶ岳」や「剣岳」のようないかにも尖ってそうな“いかつい”名前が多い。いかつさを作ったのは「氷河」だ。北アルプスは約1万年前まで多くの氷河に覆われており、岩が削られた。穂高の山々をつくる岩（溶結凝灰岩）は南アルプスの岩よりも硬く、また、岩が固まるときには縦に亀裂が入って柱のように立ち（柱状節理）、氷河に削られた結果切り立った壁として残った。比較的丸みを帯びた南アルプスの山々（Vol.154参照）とは山頂の見た目が全然違う。一言でいえば、かっこいい！ のだ。北と南の成り立ちの違いを知ってしまうと、やっぱりそれを自分の目で見てみたいと思ってしまう。

崖っぷちを歩き、垂直の壁を登るこのルートはとっても怖かったけど、一歩一歩がすごく楽しかった。「このゴツゴツの岩たちは氷河が削ったのか…！」とか「176万年前の噴火で出た火山灰が岩になつてもう3,000mにまでせり上がってきているのか…！」とかを考えながら岩を踏みしめていると、人間なんて本当にちっぽけな存在なんだと実感して、なぜかゾクゾクした。変態だな。

※くれぐれも勘違いしないでほしいが、今回、“無謀な”チャレンジはしていない。万全の準備をし、天候をギリギリまで見て慎重に判断して挑戦している。命を天秤にかけるようなチャレンジは今後もするつもりはない。

北アルプスへ初挑戦②

穂高連峰の岩稜帯



歩いたルート 涸沢のテント場を出発して北穂高岳に登り、反時計回りに稜線沿いを通ってテント場に戻った。長野県の「難易度評価」では、写真の赤点線は、難易度がA～Eの5段階で最高の「E」、体力度は10段階で「7」に指定されている（この場合、E7と表記するらしい）。アウトドア部の合宿で行った鳳凰三山の登りや富士山はB6。高尾山はA2だそうだ。



穂高連峰の岩稜帯 左図のA点で涸沢岳方向を見た写真。奥穂高岳までの稜線はごつごつした岩だらけだし、山というより岩の壁。すべて溶結凝灰岩という176万年のカルデラ噴火で噴出した火山灰が積もって押し固められてできた岩が、氷河による浸食などで削られた結果できたもの。北アルプスならではのこのいかつい岩場はとてもかっこいい。写っているのはS先生。



北穂高岳山頂（地図のA地点）で北側を見た様子 午前7時頃。山頂に着いた途端、雲が晴れて大パノラマが広がった！ あまりの絶景に言葉を失った。この景色も憧れの1つだったので、運良く晴れてくれて感無量だ。左側の先端が尖っている山が槍ヶ岳。ここ（北穂高岳山頂）から槍ヶ岳までのルートもE難度で、体力度は9。ここが日本最難関と言われている（今回はこちらには行かず、南側（奥穂高岳側）へ行った）。



涸沢カールの“ふち”を歩く（地図のB地点）

足場が狭く、ここが最も緊張した場所。スプーンでえぐったような“カール地形”は、典型的な氷河地形で、1万年前までここにあった氷河が山を削ったことによりできた。危険な場所だけれど、成り立ちを感じながら歩くのは楽しい。ヘルメットとグローブは必須。



奥穂高岳山頂（地図のC地点）で北穂高岳方向を見た様子 北アルプス最高峰、日本第三位の山頂3,190mに立った！ 今回歩いた稜線は県境なので、写真右側が長野県、左側が岐阜県。雲が出来てしまつたが、雲海の中に山々が顔を出している様子も圧巻だ。ちなみに、遮蔽物が全く無い場所にいるので、風が強くて超寒い。